

ホリスティックな癒し

(003)

ホリスティック医学とは人間まるごとを見る医学である。

人間まるごととは何か。

人間まるごととは、その人間が占有する谷間のポテンシャルエネルギーと考えている。

人体という「場」のポテンシャルと言い換えてもよい。

この「場」のポテンシャルこそ生命の本であり、生命力と呼んでもよいのかもしれない。

この生命力のうちの自らを復元する能力を特に自然治癒力と呼んでいるのではないだろうか。そして「場」のポテンシャルを高めるための行為を「癒し」とし、これまでの近代西洋医学が担当してきた臓器の故障を直す「治し」と対比させるならば、ホリスティック医学は「癒し」の医学であり、医療とは本来、「癒し」の営みであり、私たちが生きること自体が「癒し」の営みということになる。

つまりホリスティックといい、癒しといい、どちらも私たちが生きていくことにほかならない。

私たちは自らの「場」のポテンシャルを高め、私たちが含まれる環境の「場」ポテンシャルを高め、そして死後の世界の「場」のポテンシャルも高めていくのである。

- ・ 無心の心が多くなるのがよい。
- ・ 気が楽になるのが良い。
- ・ 自分を見つめる。

- ・ 天の氣に合わせる。
- ・ 氣功的人間。氣功をいつもしているような気持ちで生活をする。

・ 靈性に目覚める

・ 場の氣を高めるスピリチャリティがよい、スピリチャイズムではだめ。

・ 死を受容する、死はいつか来る、迎える準備。もう一方で生き抜くいのちと生命があつて、いのちは虚空いっぱいであり、これが入ったのが生命であると考える。

何が人を癒すのか

「癒し」という言葉を聞くことが多くなった。これは心のなかの傷や病の存在に気づき、それを「癒す」あるいは「癒してもらふ」ことを期待する人が増えてきたためであろう。近代自我は科学技術に武装されて、多くのことを達成し、人間は未曾有の便利で快適な生活をするようになった。多くの病氣も予防や治療が可能となった。しかし近代自我の力ではいかんともし難い領域があることも判明してきた。たとえば人間にとって不可避である「死」をどう受け止めるか。近代自我は「いかに生きるか」に有効にはたらくが、「いかに死ぬか」にたいしては無力である。

ここに癒しの重要さが浮かびあがってくる。従って、癒しには何らかの意味で、自我を超えたものはたらきが必要になってくる。自分の内に、あるいは外に、自我を超えたはたらきを感じるときに、癒しが生じる。

これは根本的に「操作」を超える現象なのである。しかし、現

代人はどうしても近代自我のはたらきに頼り勝ちであり、せっかくの癒しの体験を操作的に理解したり、そのような操作につきに適用しようとしたりする誤りを起こすことが多いようである。癒しは根本的に一回限りの事なのである。

- ・アメリカでは救急車では(一)のイメージの話はするな。
- ・意識不明でも(+)の話をすると治りがよくなる。
- ・祈られた人は効果があつて、癒しになって助かる人がいる。
- ・食事の時に合掌する、ありがとうございますと感謝するとき栄養はよく自分のものになる。その反対であれば吸収が悪い。
- ・日本では昔は本能として、誰でも毎日瞑想をしていた。欧米では日本人の良かったところの瞑想を取り入れている。
- ・緊張、ストレスなどはコミュニティがよくなれば、その地域全体的に病気が治る。(場のポテンシャルを高める)
- ・台湾では宗教的治癒に求める人が多い。これは2時間待って2分見てもらつて、薬をたっぷりもらつても、それだけでは癒しにならないと考えているからである。
- ・病気は人生をみなおしなさいということである。
- ・棚田の復活をかけて管理たがやすことで、としよりが癒される。これはご先祖様代々の土地であるから、管理することによって供養になり、癒しになる。
- ・癒しは祈りが大切で、治療には祈りが必要である。
- ・死を恐れてないがしろにし、遠ざける治療と、死をたぐり寄せて受容する。そして、死はいつか来るのだからと迎える準備をして治療するのでは、癒しが全然ちがう。

末期患者から学ぶこと

数十年前までは、多くの日本人が在宅で往生(臨終)を期待できた。西洋的医療の先端技術が発展するにつれて、寿命が世界一にまで延びた。他方、多くの患者が在宅ではなく、消毒された末期病棟で寝たきりの末期を向かえる運命にある。蘇生技術が進歩する結果、死の間際から蘇ってくる患者も増えた。

末期患者や死の間際から戻った患者の話に耳を傾けてみると、「日本的」とさえ言うべき多くの智慧や教訓がうかがえる。

- (1) 死は全ての終わりではなく、新しい世界への出発である。
- (2) 「あの世」で、亡き先祖や無量寿・阿弥陀に出会える。
- (3) 但し、死んでも自分が抱えた問題は消えるとは限らない。自殺未遂がイヤな状況を逃げようとしても、解決にはならない。
- (4) 気づいてみると世間の価値観はおかしくつまらなく感じられる。むしろ愛情、理解、苦労、創造、一体感、等の方が大事だという。神等が自分を裁くのではなく、自分で自分を裁くのである。お礼、お詫び、やるべきことなどを、生きている間にすべきだという。
- (5) 仮死状態でも遺族の思いやつながりを感じられる。同時に、悲嘆する家族にとっても、精神的整理が必要不可欠である。
- (6) 脳波が無いと言われたときでも、実は「体外離脱」という形で自分は病室や周囲を経験し続けていたのである。これは「脳波が無ければ、何も経験し得ない」という医師たちの信念(説)に新たな疑問をなげかけ、脳死と臓器移植についても問い直すきっかけになる。一人の患者を助けるために、

もう一人の犠牲を待ち望む医療をどう評価するか。

- ・人々は超越性を持つことで癒される。
- ・知識と霊性は両立しなければならない。
- ・めざましい治療ができた人は心が変わった人、死を受容した人
- ・なおしの治療もよいが、癒しの治療も置き去りにしないように
- ・全自然が、人が目に見えない霊が、美しくみえ、愛され、やさしく語りかけてくると思えた時が癒しのときである。